

校歌の詞

藤脇 久穂

佇つ丘は、の「佇つ」のは、「ぼくたち、わたしたち」が、です。「佇つ」は、たたずむ、たたずんで待ち望む、の意です。やがてひとり立って歩みを踏み出す日がきます。その日を待ち望むのです。懸命に生きていく下地、根のごときものを養う時期が小学校の六年間ではないでしょうか。根は、大きくゆったりと張りたいものです。

山ふところよ 「ふところ」は、温かく、安らかなところ。です。「ぼくたち、わたしたち」は美しく、安らかな環境に恵まれて貴重な六年間を過します。そして「ふところ」はまた父・母の、先生方の、法吉教育会の皆さん方の、温かく安らかな慈愛にみちた心のふところにいだかれ、すくすくと、おおらかに育ってゆくのです。

かぐわしく 馨はし、の字をあてます。心を洗い清めるような美しい香り。それは現実の、この世にはないような心にひびくすばらしい香りです。

風はさわたり 風は順風 微風、疾風、烈風……とさまざまに吹きます。小学校の六年間、さまざまの風に吹かれて幼い魂は育ちます。風は、その六年間に見、聞き、感じ、考えるといつたさまざまの体験と重ねることができましよう。

さわたり、の「さ」には、さわさわと心持よく、美しくの意を含みます。

おおらかに 「多かる」が源で、心ひろく、ゆったりとの意に用います。たくさんさんのものを吸収して心のひろい人になりますよう。

時に、「ぼくたち、わたしたち」の宇宙、つまり心の世界でもあります。

ひらく未来よ 清い、明澄な魂は、自らの心を、人生を、さらにも広く、深く拓いてゆきます。ひとり、ひとりの未来は、人類の未来、可能性につながります。

うららうらら ふつう 「うらうら」とつかい、日

校歌・愛唱歌の制定

校歌を作曲して

小林 昭三

の光がのどかで明るいきまをあらわします。そして、「うら」は、うらさびし、うらがなし、うらやむ、うらめし、のように心とか心情を指すことばです。

うらうら、うらはは、何ものにもとらわれることなく、うっとりとした心楽しい状態をいいます。

光 日光、光線の意とともに、文物の美、文化の意

を含むことばです。

ゆたかに学びゆく あり余るほど、ゆとりあるほどに満ち足り、しかもものびのびとしたさま。この六年間、広く張った根から、あらゆるものをたっぷり吸収し、知性、感情、意志とも豊かな人になりますよう。

学ぶ、は「学び」ともいうように、教えられる通り真似て、繰り返し練習し、身につけていくことです。

今度、はからずも新設校である、法吉小校歌の作曲を担当しました。大変光栄なことと感謝いたします。

わたくしは多くの校歌を作曲してきました。歌詞を手にして、これから生まれる曲の構想に思いをめぐらしながら、いささか不安と緊張に身がひきしまります。校歌は他の作品と自ら異なるからです。歌を作るとき、言葉のもつ意味あいと

音の融合が大切です。そのうえ、さらに言葉で表現できないものを音に托し、音で補うことができれば作曲者としてうれしく、満足できます。

作詞者の藤脇氏とはずっと以前からのおつき合いで、今度の仕事では何度も打合せ、お互に推敲できたことは幸でした。またその都度、田部校長にご足労をねがい、ご意見をいただきました。わたしは校歌を作曲する時の心がまえとして次の事柄に気をくばります。

「気品があること」
「力強さがあること」
「あかるさがあること」
「うたいやすいこと」
「したしみのもてること」
「簡潔であること」
など、以上のことをふまえて皆さんに愛される校歌作りに専念し、このたび漸く完成しました。学校の歴史と共に末永くうたわれることをねがい、法吉小学校の益々のご発展を心から祈ります。